

2026年2月22日 説教「塩味のきいた弟子に」

ルカの福音書 14章 25～35節

先週は14章12～24節を通して、「招きに応じる人々」と題して学びました。せっかくの宴に招かれたのに、様々な理由をつけて断った人々に比して、町の大通り、路地、垣根の所にいる人々は喜んで招きに応じました。神の国に招かれた時に、応じる信仰について学びました。

1. 徹底して従う (25～27節)

① 群衆への説教 (25) 「さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。」

大勢の人々がイエスの後について歩いていました。イエスはある時、振り向かれて、彼らに語られたのです。

② 親族をも (26) 「『わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることはできません。』」

語られたことは弟子となる心構えでありました。それは、「自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹」に加え、「自分の命」も憎まない者は、弟子になることはできないという内容でした。ここに「憎む」とありますが、イスラエルではAよりBを選ぶ、優先するという意味でそれを使うのです。それにしても、どの国の民であっても、家族は愛してやまない人々であります。イエス様を第一にしない者は弟子にふさわしくないということです。

③ 十字架を負って (27) 「『自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。』」

そして、家族以上のくせ者は自分自身です。26節は「自分のいのち」のことが課題ですが、この節ではすでに9章23節で述べられたように、「自分の十字架を負って、主に従う」ことが弟子の条件であると言われるのです。それは自我が欲するところではなく、肉が求めることがあったとしてもそれを捨て、主が命ずるところに従って進むことです。

2. 費用計算と勝利見極め (28～32節)

① 塔を築くときに (28) 「『塔を築こうとすると、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか。』」

塔とは町の象徴なのです。ぶどう園などの見張りとしての塔もあります。それを築こうとするときには、かなりの費用がかかりますから、計算を必ずします。それはじっくりと考えて行わなければならないのです。費用の不足のために、手抜きなどすれば、事故につながりかねません。

② 基礎だけ築き (29～30) 「『基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた』と言うでしょう。』」

塔の基礎を築いただけで、完成へと至らなかつたらどうなるでしょうか。それを見た者たちは批判したり、嘲笑したりするのです。「あの人は、建て始

めはしても、途中でやめてしまった。塔は完成しなかった。何という中途半端、などと、見下すというのです。

- ③勝利の見込みをつけ (31~32) 『**『また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かってくる敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。』**

もう一つは戦いの例です。ある王が別の国の王と、戦いを交えるという設定です。相手の軍勢は2万人。自軍は1万人です。相手が攻めて来るとして、守り切ることができるかどうかという課題です。旧約では、少数で勝利することについて教えてくれている箇所がありますが、ここでは客観的な情勢判断が主イエスによって語られています。熟慮して、勝つ見込みがないと判断するならば、使者を送って講和を求めることが順当でしょうと言います。ここでも中途半端に事を行うことの危うさが述べられています。

3. 聞く耳のある者は聞け (33~35節)

- ①財産を捨てても (33) 『**『そういうわけで、あなたがたはだれも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。』**

そして、イエス・キリストは言われます。中途半端ではなく、自分の財産全部を捨てるほどの覚悟を持たなければ、キリストの弟子になることはできないと言われるのです。

- ②気をなくしたら (22~23) 『**『ですから、塩は良いものですが、もしその塩けをなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。』**

そして、結論のようにして、もう一つのたとえとして塩が出てきます。山上の説教の冒頭近くでイエスは教えています。「あなたがたは地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立てず、外に捨てられて、人々に踏みつけられます。」(マタイ5:13)とあります。キリストを信じる者が地の塩であるというのは、塩が腐り防止の役割を果たすことがまずあります。腐り防止の役割を果たさなければ、塩の役目はないのです。それは調味料としての塩の点から言っても同じです。塩味をなくした塩は、調味料としては使いものにならないのです。

- ③役に立たない (24) 『**『土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられてしまいます。聞く耳のある者は聞きなさい。』**

塩は畑に用いられたのです。良い作物を育ちやすくするのに用いられたのです。しかし、その役割を果たせなくなれば、もはや用をなさないので、外に投げ捨てられることになってしまいます。

「聞く耳のある者は聞きなさい」と主が言われるときには、重要なことが語られる時に、主が使われる言い方です。語られたことの意味について、歩きながら話を聞いた人々はどれほど悟ったことでしょうか。

《展開と結論》今朝の聖書箇所は、歩いている最中に、イエスが振り向いて語られたことですが、その内容はチャレンジに富んでいました。

なにしろ、イエスの弟子となるために、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そして自分のいのちをも捨てて、イエスについて来なければならないとイエスと言われたのです(26節)。イエスに従うことについては、27節、33節にも語られていますから、この箇所全体の主要課題である事は間違いありません。

しかし、途中に出てきた、いくつかのたとえ話とは、一読するだけではつながってきません。しかし、これらはイエスが、主の弟子とは何かを教えるために語られたのです。それでは、どのようにつながっているのでしょうか。塔を建てる人が費用を計算して臨むという話、多勢に無勢で戦うかどうかの判断の話、この二つの話はいずれも中途半端にとりかかるならとんでもないことになるということが語られようとしています。塔を建てることを計画するなら、確実に完成することを目指してしっかりと費用計算をするべきだと話は進んでいます。また、戦いの例は、勝利する見込みがないなら、むしろ講和を求めべきだと話の中で言われています。

つまりは、キリストの弟子とならんとするなら、しっかりとキリストに向き合うべきだということを示すために、二つの話は語られているのです。塔であるならば確実にそれが完成するような心を持つべきだし、戦いであれば勝利を目指してゆくべきだということです。中途半端にキリストに従い、途中で逃げ出すような姿勢であってはならないことが述べられているのです。親子、妻、兄弟を捨ててまでと言われると、びっくりするのですが、それほどの覚悟をもたなければ真理を見出すことができないということが語られているのです。そして、そうでないと塩でありながら、塩気がしないものになってしまうのです。つまり、キリストに従っているのに、キリストの香りがしないクリスチャンであれば意味がないと言われているのです。

あの12弟子たちは、何もかも捨ててイエス・キリストに従って歩み始めましたが、中途半端でした。この世の栄達の考えに影響され続けていました。主の十字架と復活により、目が開けられました。彼らは使徒として立てられ、聖霊降臨の出来事で一新されて宣教に献身していきました。

私たちの歩みも、中途半端の覚悟で始まる場合もあります。また、キリストから目を背けてしまっている場合もあります。確信が持てない場合もあるかもしれませんが、しかし、どうでしょう。私たちは、イエス・キリストにあって生きようとした者たちです。クリスチャンとして、さらに成長するために、塔を建て完成する覚悟、霊的戦いに勝利する覚悟、塩味のするクリスチャン生活を目指して歩いていこうではありませんか。弟子とは学ぶ者という意味です。キリストを学んでいきましょう。キリストを徹底的に見上げていく道には霊的勝利の道があります。説教者自身、若い時に自らの御言葉として与えられたルカの福音書9章23節及び今朝の主の教えを改めて向き合い、進んでいこうと再決意しました。兄弟に主の祝福がありますように。